霞

―2020年度夏季展示室だより―

土浦市立博物館

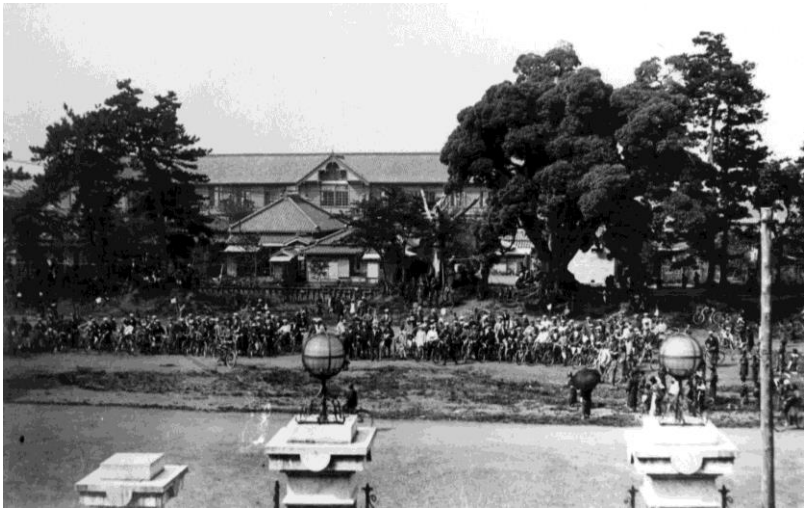
令和２年６月30日発行（通巻第50号）

当館では「霞ケ浦に育まれた人々のくらし」を総合テーマに、春（５～６月）・夏（７～９月）・秋（10～12月）・冬（１～３月）と季節ごとに展示替えを行っております。本誌「霞（かすみ）」は、折々の資料の見どころを紹介するものです。展覧会や講座のお知らせ、市史編さん事業や博物館内で活動をしている研究会・同好会などの情報もお伝えします。

目　次

○古写真･絵葉書にみる土浦（50）・１
○博物館からのお知らせ・・・・・１
【新型コロナ対策及び 50 号記念】
○霞ケ浦四十八津掟書（近世）・・・２
○岡部洞水画 関克明・思亮書「大猷公之三傅図」（近世）・・・・・・・・・３
○時代の変わり目に藩主を譲る（近世）・４
○疫病から命を守る（近代）・・・・５
○市史編さんだより・・・・・・・・６
○土浦藩土屋家の横顔・・・・・・・７
○霞短信「うれしかったこと」・・・８
○ コラム（50）・・・・・・・・・・・８
○情報ライブラリー更新状況・・・８

古写真･絵葉書にみる土浦（50）
古写真「遠乗り会出発風景」



大正６（1917）年５月20日、「いはらき」新聞土浦出張所主催の筑波山神社参拝遠乗り会の出発風景です。土浦公園（亀城公園）に、たくさんの自転車を引く人たちが集まっています。正面の洋風建築は明治44（1911）年建築の土浦小学校の校舎、右手の大木は「亀城のシイ」（県指定天然記念物）、手前の門柱は本丸跡に建った新治郡役所の正門です。　【情報ライブラリー検索キーワード「城址と公園」「土浦城」】

博物館からのお知らせ

博物館マスコット
亀城かめくん

＜再開館後の新型コロナウイルス感染拡大防止策について＞

土浦市立博物館は新型コロナウイルス感染拡大防止のため、４月４・５日および４月９日～５月25日まで臨時休館いたしました。特別展「土浦城」が会期途中で終了となり、本展覧会を楽しみにされていた多くの皆様にご見学いただけなかったことは大変残念です。再開館にあたりましては、展示間隔の見直しや入館制限を行うとともに、共有部分の定期的な消毒を実施するなど、安心してご利用いただけるよう努めております。なお、展示の解説や講演会などは、当面の間中止といたします。皆様におかれましても、咳エチケットや他のお客様との距離を保った見学などのご協力をいただきたく、よろしくお願いいたします。

＜展示室だより「霞」が第50号となりました＞

総合テーマ「霞ケ浦に育まれた人々のくらし」の見どころをご紹介する展示室だより「霞」が、第50号の節目を迎えました。「霞」では2007年夏のリニューアルオープン以来、年回４回の展示資料の入れ替えにあわせて、展示品のキャプション（説明文）よりも一段詳しい資料解説を行ってきました。2007年秋に初めての展示替えを行った際に第１号を発刊いたしましたので、今夏で50回目の展示替えを実施したことになります。

本誌は見学時の「手引き書」であると同時に、霞ケ浦と土浦に視点をすえた地域史の「読み物」でもあります。資料の収集と調査・研究に基づく展示公開を継続するとともに、ひとつひとつの資料がもつ意義や奥深さを皆様と分かち合える誌面を目指すことで、土浦の歴史と文化を再発見していきたいと思います。

２０２０年度　夏季の展示資料解説①　近世

霞ケ浦四十八津掟書（しじゅうはっつおきてがき）

―史料から地域の「来し方、行く末（こかたゆすえ）」を考える―

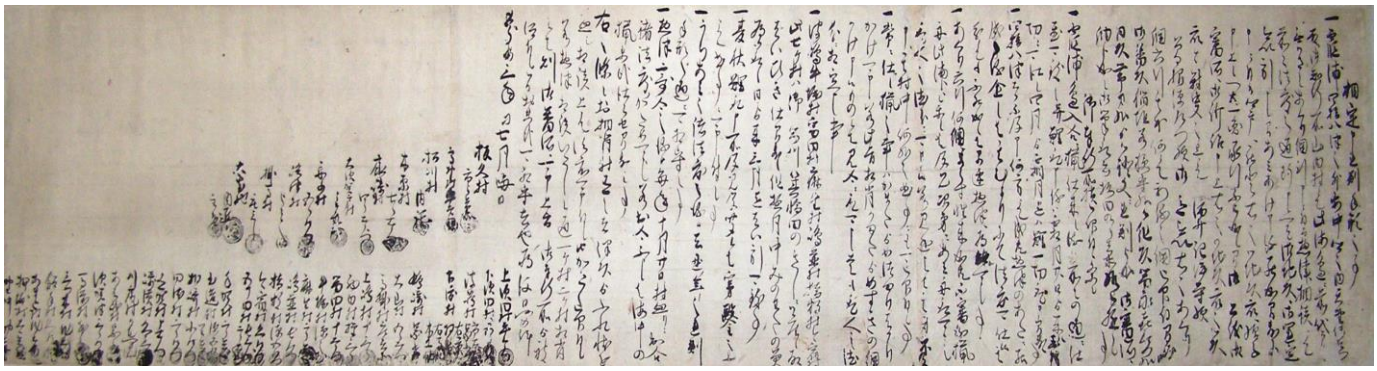
展示室だより「霞」第 50 号を期に、霞ケ浦を視点に地域史を深める総合展示のコンセプトに立ち返り、第７・８号でご紹介した「霞ケ浦四十八津掟書」（市指定文化財）を三度（みたび）取り上げたいと思います。

江戸時代の霞ケ浦には、四十八津とよばれた組織があり、霞ケ浦はもともと四十八津に属する村々が自由に漁をすることができる共同利用の場、「入会（いりあい）」の湖でした。しかし、江戸時代初期に湖の一部に「御留川（おとめがわ）」とよばれる幕府の専用漁場が設定され、そこでの自由な漁が禁止されました。寛永２（1625）年には、玉里（たまり）村地先も水戸藩の「御留川」となりました。村の地先が「御留川」に設定されると、領主に対して漁獲による運上（うんじょう）（税）を納める場となりますが、その専用漁場となることで他村の利用を排除することができ、地先の湖を安定的に利用できるメリットがあります。しかし、「御留川」の設定は、湖全体を入会とする四十八津の原則が崩されることを意味しますので、四十八津の村々はこれに抵抗しました。

当館所蔵の「霞ケ浦四十八津掟書」は、慶安３（1650）年のもので、現存する四十八津の議定書の中ではもっとも古い史料です。山内（やまうち）村（現美浦村）が地先の水面を領主の「御留川」にしようと画策したため四十八津がこれを阻止し、あらためて霞ケ浦が入会であることを確認しました。あわせて漁期や漁法、使用する漁具を取り決めました。また、違法な漁をみつけた時の対応や、毎年 10 月に村々が集まり会合を開くことも記されています。

1950 年代、歴史学者の網野善彦（あみのよしひこ）（1928～2004）は、霞ケ浦の水産史料の調査を進める中で、自治組織としての「四十八津」に注目しました。網野氏の当初の関心は、抵抗する民衆の姿と、やがて権力に取り込まれ衰退していく過程にあり、この自治組織の淵源（えんげん）が中世の「海夫（かいふ）」にあることも指摘しました。

その後、網野氏の関心は、漁民たちが定期的に湖の問題を議論し、緊急事態に結集するといった湖の民の「力」の在り方に移ります。これは、1980 年前後に霞ケ浦を再訪した折、アオコに満ちた湖を見て環境問題を強く認識したことが背景にありました。かつての霞ケ浦の漁民たちが湖をどのように管理してきたのか、その力の根源を歴史家の視点でたどることによって、「資本の論理」により死に瀕していた湖の現状と、「湖に生きた人々の論理」を対置させようとしたのです。史料を出発点として、地域固有の歴史を考察し、現代社会の問題から地域の未来を考えようとしたその姿勢に学びたいと思います。　　（萩谷良太）



霞ケ浦四十八津掟書「相定申連判手形之事」（当館所蔵、土浦市指定文化財、写真は複製品）

夏季展示では館内での解説会は行いません。左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
（いずれも近代コーナーに展示）

●土浦地方の漁労用具（当館所蔵）
●「湖川沼漁略図并収穫調書」（当館所蔵）

おかべとうすい　せきこくめい　しりょう　だいゆうこうのさんふず

岡部洞水画 関克明・思亮書「大猷公之三傅図」

「大猷公之三傅」とは、大猷公（徳川家光）の守役を務めた、青山忠俊（1578～1643）、酒井忠世（1572～1636）、土井利勝（1573～1644）を指します。忠俊は剛強で、合わせ鏡で衣装を直していた家光に諫言した逸話があります（写真右）。忠世は質実剛健を尊び、家光が持っていた華美な印籠を打ち砕いたとされ（写真中）、忠世と忠俊を煙たがる家光に対し、利勝は酒を飲みながら２人の諫言の正しさを伝えたといいます（写真左）。幕府の儒官林信徵（鳳潭　1761～87）が３人それぞれの主張を漢詩に詠み、賛を付けていますので、読み下してご紹介しましょう。

寛柔を以て義を懽び、是慕わしむれば、虎のごとき貌のごときも何ぞ懼るる所有らんや〈忠俊〉
百行の本、いずくにか依らん、いずくにか求めん、神福に民やすらげば何ぞ憂うる所有らん〈忠世〉
之を察するにいまだあらわれざるも、隠匿する所なければ、禍を免れ、身を保つになんぞ惑う所あらんや〈利勝〉

「大猷公之三傅像」は、幕府草創期に補佐役として重きをなした徳川家の重臣らに、それぞれ個性と役割があったことを伝える作品として、好んで描かれたようです（国立公文書館などにも作品が伝わる）。

本作品も家光の時代からおよそ 150 年後、土浦藩の絵師岡部洞水（1780 頃～1850）と書家関克明（1768～1835）・思亮（1801～30）父子、３人の合作で描かれました。

克明は、字を子徳、号を潢南といい、関家２代其寧の嗣子となり３代を継ぎました。思亮は克明の子で、字を世達、号を東陽といい、昌平黌教授古賀精里に師事しましたが、30 歳で亡くなりました。克明は思亮を助手として『行書類纂』全 12 巻を編集し、これらは天保４（1833）年に刊行されました。行書の大字典である本書には、当時学者・文人として著名であった立原翠軒、亀田鵬斎、大窪詩仏らの序文があり、輪王寺宮を経て、光格・仁孝両天皇の叡覧に浴し、広く世間に流布しました。

土浦藩士として、ともに土屋家に仕える３人が、この作品を合作したのは、藩主に対する忠誠は家光の時代と変わることはなく、自分たちも個性ある藩士であるべきことを表現したかったのかもしれない、と推測しています。（木塚久仁子）

「大猷公之三傅図」（当館所蔵）☞

利勝と盃

忠世と印籠

忠俊と鏡

夏季展示では館内での解説会は行いません。左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
（いずれも近世コーナーに展示）
●行書類纂（当館所蔵）
●岡部洞水画「朱買臣図」（個人所蔵）

２０２０年度　夏季の展示資料解説③　近世

時代の変わり目に藩主を譲る

―土屋寅直「隠居家督奉願候覚」―

土屋寅直（1820～95）は土浦藩土屋家 10 代目の当主です。父彦直が眼病によって隠居したため、天保９（1838）年に家督を継ぎ、18 歳で藩主となりました。寅直は幕府でも要職を務めました。同 14 年に奏者番に就くと、嘉永元（1848）年に寺社奉行、同３年には大坂城代を務めました。寅直には当時７人の子供がいましたが、いずれも若くして亡くなりました。そのため養子に迎えたのが、挙直（1852～92）でした。

挙直は水戸藩主徳川斉昭（1800～60）の 17 男として生まれました。このことから、挙直の幼名は「余七麿」といいます。養父となる寅直は当初、余七麿ではなく、余四麿（松平昭訓）を養子に迎えるべく、水戸徳川家と交渉し、話が整っていました。しかし、文久３（1863）年５月に差し支えがあるとして，養子は余四麿から余七麿に変更となりました。余七麿の養子入りは、同年８月に幕府へ願い出て許可されました。この時に、幼名の余七麿から挙直に名を改めました。なお、余四麿は京都で病床に伏し、同年 11 月 23 日に亡くなりました。

さて、慶応４（1868）年３月、49 歳になった寅直は、挙直に家督を譲り隠居しました。「隠居家督奉願候覚」によれば、寅直は疝痛（下腹部に激しい痛みを伴う病気）を患っていたことを理由に、江戸幕府の奏者番と寺社奉行の職を辞しています。ここには、幕府の医官多紀養春院（安琢）から処方された薬を服用し、漢方医浅田宗伯に容体を見させるなど、様々に手を尽くしても回復しないため、隠居を決めたと記されています。寅直はいくつか持病があったようで、ほかにも「痔疾」や「胸痛」に悩まされていたことが、土屋家の系譜「御系譜」（国文学研究資料館所蔵）には記されています。幕末の動乱期に藩主を務め、持病にも悩まされていた寅直は、家督を譲ることで、ようやく重責から解放されました。

一方、当時 17 歳の挙直は、土浦藩最後の藩主となりました。家督を継ぐ約半年前の慶応３年 10 月 14 日には大政奉還、約２ヶ月前の同４年１月３日には鳥羽・伏見の戦いが起こっています。先代の跡を継いだ若き藩主は、先の見えない不安な日々を過ごしたものと思われます。　（西口正隆）

「隠居家督奉願候覚」（個人所蔵）

夏季展示では館内での解説会は行いません。左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
（いずれも近世コーナーに展示）
●知藩事任命決意表明書（当館所蔵）
●土屋挙直所用　黒漆塗紺糸威胴丸具足（個人所蔵）

２０２０年度　夏季の展示資料解説④　近代

疫病から命を守る

―戦前・戦中の種痘済証から―

疫病は人類の歴史を大きく動かしてきました。今、新型コロナウイルスによる感染症という脅威に直面し、私たちはどう生きるかを試される歴史のただなかにいると言えます。

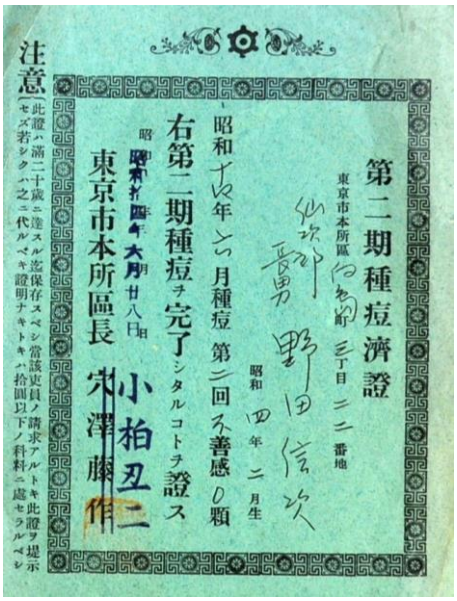
1980 年にＷＨＯ（世界保健機関）が根絶を宣言した感染症に、痘瘡（天然痘）があります。痘瘡ウイルスによる感染症で、伝染力がきわめて強く、死亡率も高く、発疹は体に深く傷あとを残すものでした。古代から長く続く病でしたが、1796 年にイギリスのジェンナーが、より安全性の高い牛痘（牛の痘瘡）から痘瘡のワクチンを作ることに成功し、以来、改良を重ねながら世界中で利用されていました。

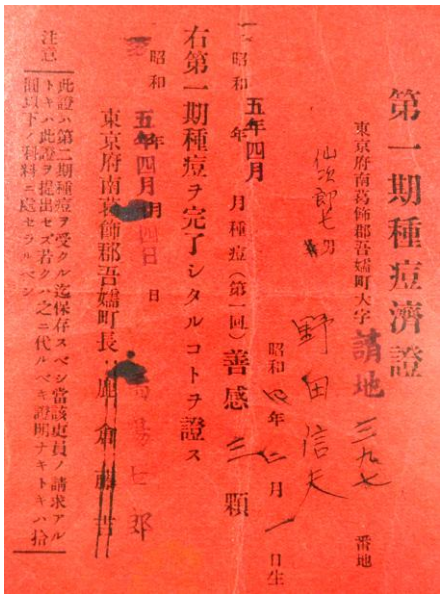
写真は、東京市本所区（現東京都墨田区）で生まれ育ち、現在は市内城北町にお住まいの野田信次さん（昭和４年生まれ）の種痘済証です。種痘とは天然痘の予防接種のことで、２回の接種が義務付けられ、野田さんは第１期を１歳２ヶ月のときに（写真右）、第２期を 11 歳のときに（写真左）接種しています。証書は、第１期のものは２期を受けるまで、第２期のものは 20 歳まで、保存が義務付けられていました。

こうした予防接種はいつ頃から実施されていたのでしょうか。明治５（1872）年に発布された学制をひもとくと、第 211 章に「小学校ニ入ル男女ハ種痘或ハ天然痘ヲ為シタルモノニ非レバ之ヲ許サズ」という規定があります。当時の日本は、痘瘡・コレラ等の伝染病の大流行にさらされており、学校は危険な媒介所となる恐れがありました。伝染病の予防は学校衛生の基本とされ、予防接種は大切な義務となっていました。

昭和 12（1937）年の日中戦争の勃発に伴い、日本は戦時体制に移行していきます。野田さんが２回目の種痘を接種した同 14 年はこうした時期で、国民の体力を積極的に向上させ国防の目的に資することが、より一層求められていました。同 20 年３月、野田さんは東京大空襲を経験します。幸い家族の命は無事でしたが、空襲で自宅は全焼してしまいました。この種痘済証は、野田さん自身が残した記憶は無いそうですが、戦時下という非常時であっても、子供の健康状態を証明する証書として、大人が大切に保管していたと考えられます。

新型コロナウイルスに対して、現時点では特効薬もワクチンもありません。しかしそのような中でも、正しく怖れ、冷静に命を守る行動をとる努力を続けることが、今私たちに求められていると思います。　　（野田礼子）





種痘済証（いずれも当館所蔵）☞
右：第１期、左：第２期

夏季展示では館内での解説会は行いません。左のＱＲコードから解説動画のウェブページへアクセスできます。

下記の資料もあわせてご覧ください。
（いずれも近代コーナーに展示）
●我校に於ける学校衛生の実際（当館所蔵）
●母子健康手帳（個人所蔵）

市史編さんだより

『土浦関係中世史料集　下巻』余録　―以字点について―

昨年３月刊行した『土浦関係中世史料集　下巻』の中に、刊行後に分かったことが一つありましたので、それをご紹介したいと思います。

第Ⅴ編第二章戦国小田氏関係記録の「15　四吉備雑書」（P.238）の所です。この史料は歴史を学ぶ人によく知られており、一般に「吉備雑書」とされていたものです。その中に「一、厥陰陽八卦吉備大臣真保朝臣伝也」として、八卦で歳の禍福や方忌を説く部分があり、これが書名の元かと思われますが、私はこの「吉備真保の伝」をこの書全体ではなく、「厥陰陽八卦」だけを指すと解し、書名は後から付けられたと思ったのです。『国書総目録』に吉備真保伝『陰陽八卦之法』（寛永５年刊）がありますが、その内容も、吉備真保がどういう人かもまだ分かりません。「吉備大臣真保」とあるので、奈良時代に右大臣になった吉備真備との関係がうかがえる程度です。

問題は、表紙の書名が「〻吉備雑書」とあることなのです。発刊する迄にこの「〻」が読めず、といってそれを省くわけにもいかず、注記に「多くは「吉備雑書」とするが、吉の上に付く「〻」を二二即ち四と見て、しきび＝榕と解する。」としたのです。榕はしきみともいい、『広辞苑』には、「モクレン科の常緑小高木。山地に自生し、また墓地などに植える。（中略）仏前に供え、また葉と樹皮を乾かして粉末とし抹香または線香を作り（後略）」とあります。この書が神仏混淆で陰陽道も混在する、いわば吉凶を占う書で、書中の年号の下限が永禄７(1564)年、戦国期のものですから、書名は後から付けたとみて、吉備と榕を掛詞にして「しきび」としたのではないかと考えたのです。

ところが、「〻」が分かったのです。『朝日新聞』（2019 年９月 28 日 be 欄）の「街のＢ級言葉図鑑」に、

> この記号は「以字点」と言います。由来としては、梵字の「イ」の変形、「以」の字、「水」の字、さらには四天王を表す、などの説がありますが、真相は不明です。

とあったのです。早速手元にある中村元著『仏教語大辞典』を調べました。そこには、

> 経の題箋または護符の上隅に付する「〻」点を言う。悉曇の𑖦（伊）の変形とも、水字とも、あるいは護世四天王を表すともいわれる。

とあります。「伊」の字は密教では一切法（万法）の根で、一切法とは一切の事物・現象、物質的・精神的なすべてを指します。根は器官・能力の意、六根といえば眼・耳・鼻・舌・身・意ですが、伊を災禍の声とする解釈もあります。「以」は中央の点を取ると「〻」になり、伊と以は同音です。「水」は中央の縦棒を取ると「〻」になり、五行説の木火土金水の水に当たります。護世四天王は護国四天王ともいい、持国天・増長天・広目天・多聞天（毘沙門天）の四天王です。私が考えたように「〻」を四とすれば四天王の四になりますから、私にはこの説が魅力的です。

意味や由来は以上で、辞典は語（概念）として扱いますが、点は記号ですから護符あるいは飾りとも見られます。史料集ではどちらに扱うべきだったでしょうか。いずれにせよ、ルビを「以字点」とした「〻」を載せ、注記を加えればよかったかなとは思っております。

（元市史編さん係　雨谷　昭）

土浦藩土屋家の横顔

このコーナーでは、土浦城を200年治めた土屋家の歴代藩主を、系譜を読み込みながらご紹介します。

基本的には『寛政重修諸家譜』を用い、「土浦土屋家系譜」（『茨城県史料　近世政治編Ⅲ』所収）で補足しました。引用はゴシック体で示しています。

※（）内は筆者註

その五、土屋寿直【つちや ひさなお】

辰之助　左京　相模守　従五位下

もっとも短い在任期間　安永五年七月十六日遺領を継。時に十六歳。

寿直は４代藩主篤直の長男として宝暦11（1761）年５月22日に生まれました。安永５（1776）年５月20日、篤直が45歳で亡くなると、翌々月の７月16日に、遺領９万５千石を継いで５代藩主に就任しました。時に寿直は16歳、12日後の７月28日には早速将軍徳川家治に拝謁しています。同年12月には相模守に叙任されました。相模守は長く老中を務めた曽祖父政直の受領名です。期待の若き藩主はしかし、翌安永６年７月19日に亡くなってしまいました。享年17歳。在任１年は、11代を数える土屋家歴代藩主のなかでもっとも短期間です。

若くして亡くなる　年十七。彰善惟顕俊良院と号す。

寿直の死について、『寛政重修諸家譜』も「土浦土屋家系譜」も、没した日を記しているだけです。戦後まで土屋家が手元においてきた手書きの「御系譜」（当館所蔵）を参照してみると、「当春より以来、疾病するところなり」と、安永６年春から具合が悪くなり夏（７月）に亡くなったこと、また、亡くなる当日に弟泰直の養子縁組願いが出され、あまりに急であったため大目付が土屋家の屋敷に様子を見にやってきたこと、その日の午後６時ごろに亡くなったことが明らかになりました。

また、寿直は、奏者番や老中など父祖が就いてきた幕府の要職に就任する間もなかったと考えられていましたが、安永５年10月には江戸城内の火消「大手組」に任命されたことが書かれています。大名火消の一種である大手組・桜田組にはそれぞれ４人の大名が任命され、江戸城への延焼を防ぐ役目にあたりました。

母親は、大名秋元家の家臣和田氏　母は某氏。

寿直の母親の出自は、『寛政重修諸家譜』にも「土浦土屋家系譜」にも書かれていませんが、前述の「御系譜」には「母家女和田氏」、「土屋家略系」（当館所蔵）には「御生母　勢智院殿　秋元臣和田氏」と手がかりがありました。「秋元」とは、政直とともに徳川綱吉・家宣に老中として仕えた大名秋元喬知（1649～1714）の系統ではないかと推測されます。勢智院は正室ではありませんでしたが、篤直との間に寿直と女子２名を授かりました。女子１名は夭折するものの、安永２（1773）年に誕生した芳子は成長し、大名松平忠宝の室になりました。土屋家の祈祷寺である神龍寺の位牌によれば、勢智院は寛政８（1796）年７月６日に没し、土屋家の菩提寺である浅草海禅寺に葬られました。

（木塚久仁子）

霞短信

Kasumi-tansin

「霞短信」コーナーでは、博物館活動に関わる方々の声や、サークル活動記録などをお伝えしております。

今号は、当館付属展示施設東櫓で長年にわたり受付業務を務められた、大山清一（おおやませいいち）さんに寄稿していただきました。

うれしかったこと

私は令和２年の３月まで東櫓の受付業務を担当していましたが、時折要請に応じて館内ガイドをしたことがあります。

東櫓で最も着目してほしい点は、直径が70cm以上もある丸太の梁（はり）と１尺角の太い柱とをメインにしながら、釘を使わない伝統的な工法で組立てられた木造の棟組みです。

来館者の中には入館すると、それらの豪華さに気づかれて天井を見上げたり、柱を触ったりする姿が見られました。「すごい！」と、感嘆の声をあげる方もいました。そしてお帰りの際、「木のぬくもりがいいね。」「木造での復元は珍しい。」などの賞賛をいただくことがありました。以上のように特徴を見取ってくれる方がいることは、担当としてもうれしいことでした。また、掲示物等を熱心にご覧になった方から「土浦城が、なぜ亀城と呼ばれているのか？」や「土浦藩領が、あちらこちらに点在してあるのはなぜか？」「ここに“長篠の戦い”の図があるが、土浦藩との関係は？」などの質問を受けたこともありました。

一昨年・昨年の入館者は、それまでより年間で5000人も増加し、約１万3600人でした。魅力的な企画展と相まって、一昨年の４月、土浦城が“続日本100名城”に選定されたことを契機に“東櫓を模した記念スタンプ”を求めて多くの方々が、全国各地から訪れてくれています。年に数回ですが、“名城巡りツアー”の団体客もお見えになっています。このように多くの方々にこの文化財を見学していただけることは、担当の喜びでもありました。

桜の開花時、２階から望む景色は絶景です。１枚の絵のような景色をご覧になりに、またお越しください。

大山　清一（元博物館付属展示施設東櫓受付）

コラム（50）　特別展「土浦城」と続日本 100 名城

特別展「土浦城—時代を越えた継承の軌跡」が令和２（2020）年３月 14 日から開催されました。開館 32 年を迎える博物館として、土浦城を真正面から取り上げた初めての特別展です。この企画の立案を後押しした重要な出来事として、平成 29（2017）年４月６日の公益財団法人日本城郭協会による「続日本 100 名城」の選定がありました。茨城県内では土浦城とともに笠間城（笠間市）が選ばれ、スタンプ帳を片手に全国の城をめぐる人々が土浦にも訪れるようになりました。100 名城の選定の基準には、優れた文化財・史跡、著名な歴史の舞台、時代・地域の代表であることがあげられています。実は、同協会が選定の発表を行った４月６日は、国宝の姫路城がある兵庫県姫路市などが制定した「城の日」でもありました。残念ながら今年の城の日は、新型コロナウイルス感染拡大により、城を鑑賞することもままならない状況となってしまいました。

（関口満）

情報ライブラリー更新状況

【2020・６・30　現在の登録数】

古写真　600 点（＋１）

絵葉書　512 点（＋１）

※（　）内は 2020 年１月５日時点との比較です。展示ホールの情報ライブラリーコーナーでは画像資料・歴史情報を順次追加・更新しております。１ページでご紹介した古写真・絵葉書もご覧いただけます。

霞（かすみ）　２０２０年度
夏季展示室だより（通巻第５０号）
編集・発行　土浦市立博物館
茨城県土浦市中央１－１５－１８
ＴＥＬ　０２９－８２４－２９２８
ＦＡＸ　０２９－８２４－９４２３
http://www.city.tsuchiura.lg.jp/section.php？code=43

１～５ページのタイトルバック（背景）は、博物館２階庭園展示です。

2020 年度夏季展示は、**2020 年６月 30 日（火）～９月 27 日（日）**となります。「霞」2020 年度秋季展示室だより（通巻第 51 号）は **2020 年９月 29 日（火）発行予定**です。次回の来館もお待ちしております。

※展示室だより「霞」は、当館ホームページからもご覧になれます（カラー版）